

目的 家庭科指導の前提として、子どもに基本的な生活習慣が確立されていなければ、授業は成立しにくい。基本的な生活習慣形成の上に教科指導が可能になるわけである。近年のこの実態は、家庭科指導に多大の支障をもたらしてきている。そこで家庭科の指導の程度と範囲の再検討のため、子どもの発達段階に応じた基本的な生活習慣形成のレベルを調査し、家庭科の指導内容と方法を考える基礎とすることが目的である。

方法 大阪府下某中学校1～3年生900名と、その校下にある小学校及び幼稚園（保護者対象）に対して、アンケート調査を行った。調査項目は、家庭科学習にかかわる生活習慣を選定したものである。

まとめ 子どもの家庭生活習慣形成は、生徒及び児童が家庭生活学習の基礎的事項として不可欠なものであることはいうまでもないことである。中学生、小学生及び園児の家庭科学習前の能力としての家庭生活習慣形成は、この調査では現在の家庭教育にだけそれを期待することは困難であることが確認できた。家庭科の指導の中に、基本的な生活習慣形成までを配慮するということになると、家庭科の範囲と程度は相当にかわってくる。これまでの家庭科は、前時代の家庭像の基盤の上で成立してきたものである。これからの日本の家庭像は、各々の家庭で創造していくものであろうが、家庭生活に対する認識、価値観は多様化し、そこに学校教育からの指導が必要になってきている。この調査から得た家庭生活習慣形成過程の実態から、子どもの発達段階に応じた家庭科指導の内容と方法を考えようとするものである。